

私はこの2年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。

また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998年から2000年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市の外国語大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

1. ティーンエイジャー

先日の金曜日、ポズナン市の中心街にあるマクドナルドに入った。参加しようと思っていたミサまでまだ少し時間があつたので、コーヒーでも飲もうと、教会近くの店舗に入ったのである。

レジには何本もの行列ができていた。かなり流行っている。コーヒーを受け取ると、広いホールを横切り、ガラスの壁の向こうに往来を眺める席に腰を下ろした。あちこちのテーブルで賑やかに談笑している客は、



ほとんどが十代と見える若者たち、あるいは子供たちである。友達同士で来ているようで、楽しそうにハンバーガーを食べている。もちろん、独りで来ている者もいる。遅めのランチを食べているのだろう。とにかく、家族連れはほとんど見られない。

メニューは、日本のマクドナルドと大して変わりがない。値段は、ビッグマックの単品が8.6ズウォティ、セットが14.1ズウォティなので、1ズウォティを約30円(2010年7月現在)とすると、それぞれ約250円、420円くらいの計算になる。東京ではビッグマックの単品が320円、セットが650円であるから、一見安いように見えるが、ポーランド人の平均的な月収を考えると、決して安くはないはずである。

ポーランド中央統計局の発表によると、2009年のポーランド人の平均月収は約3,000ズウォティ、つまり90,000円前後となっているが、実際には、コンピューター・プログラマーなど一部の高給取りが月に6,000ズウォティあるいはそれ以上も稼いでおり、ほとんどの人は1,500ズウォティ前後の月収、中には800ズウォ



— ポーランドだより —

変わりゆくポーランド

ポズナン市在住の(当協会特派員?)が業を垣間みることで「ポーランドの経

テイほどの人もいるくらいである。

もう10年以上前の話になるが、クラクフの旧市街のフロリアンスカ通に初めてできたマクドナルドに入った時のことを思い出す。古都クラクフの一番の目抜き通り沿いという場所柄のせいもあつただろうが、当時の客は、家族連れが多かった。当時のマクドナルドは、家族と一緒に休日の外食を楽しむレストランといった感じの場所だった。もちろん、独りで来ている者もあつたが、その場合もビジネスマン風の大人が仕事の合間にランチを食べているといった感じだった。少なくとも、子供たちが友達同士でやって来て、軽くランチを食べるような場所ではなかった。ポーランド中央統計局によると1997年の平均月収は約1,000ズウォティであるが、実際にその頃ポーランドで生活していた身としては、一か月700ズウォティぐらいで生活していた人がほとんどだったように思う。



ポーランドに最初のマクドナルドができたのが1992年である。以来これまで、ポーランドに関する面白いエピソードとして「マクドナルド＝高級レストラン」という図式がたびたび語られてきた。

しかし、最近のマクドナルドを見ながら言えることは、経済的に裕福な家庭が確実に増えているということ、その結果として、そうした裕福な家庭の子供たちが友達同士で気軽に食べに行けるようになっているということである。1989年の民主化以降ポーランドが歩んできた政治的・経済的な路線と、そこから来る変化とを改めて実感した。

2. 金曜日

私が驚いたのは、客のほとんどが十代の若者たちで、しかも友達同士で気軽にハンバーガーを食べていたことだけではない。加えて、その日が金曜日だったことである。

ポーランドがカトリック教徒の国であることはよく知

のファースト・フード

ら届いたホットな情報！それは「外食産
済がわかる」とても興味深いものでした。

津田 晃岐

られている。国民の 90 パーセント以上が洗礼を受けており、ローマ・カトリック教会の定める聖人にちなんだ名を持っている。

ローマ・カトリック教会では、毎週金曜日を小斎の日と定めている。小斎というのは、鳥獣の肉を食べない食事制限のことで、イエス・キリストが十字架にかけられた金曜日に、その受難を記念して行われる。



毎週金曜日の小斎の習慣は、現在でも残っている。ポーランドでは普段魚を食べることはほとんどないのだが、例えば会社や学校の食堂では、金曜日には肉料理ではなく魚料理が出されることが多い。またミルク・バー (bar mleczny) など街の食堂でも、金曜日の「日替わり定食」は魚料理のことが多い。もちろん金曜日でも、メニューにあれば、肉料理を注文することはできる。

ただし、この小斎の習慣は、今ではかなり形骸化しており、少しずつ消えようとしている。公共の食堂でこそまだ名残を留めているものの、それらの場所でも決して食べられないわけではない。また、各家庭の食卓となると、果たしてどれだけ守られているものか分かったものではない。現に、まったく気にすることなく、金曜日にも肉食している人はたくさんいる。

昔からの「伝統」という程度で、小斎に対して特に反発もしないが、かといって積極的に守ろうと努力する必要までは感じない。そうした傾向は、もちろん若い世代ほど顕著だが、しかし年配の人たちの中にも、現在ではかなり強く見られる。

そういうわけで、金曜日であろうとなかろうと関係なく、ハンバーガー屋のレジには行列ができています。「カトリック教徒の国」ポーランドで、金曜日のハンバーガー屋で行列が見られるということは、資本主義を積極的に導入してきたポーランドの精神的な変化をも、つまりポーランド人がカトリック教から少しずつ離れていることを物語っている。

3. 多国籍

有名なシンガーソングライター、クシシュトフ・ダウクシェヴィチは 2000 年に「ドライブ・スルー」の中で、ポーランドの「発展」をアイロニカルにこう描いている。

チェンストホーヴァまで辿り着いた。
そしたらマクドナルドが 2 軒立ってた。
ドライブ・スルー、ドライブ・スルーよ！
なんて見事に発展してるんだ、この国は！

チェンストホーヴァというのはポーランド国内最大の聖地で、そのヤスナ・グラ寺院には、ポーランドの守り神として信仰を集めている「黒い聖母」像がある。現在でも巡礼が絶えることはなく、毎年 8 月 15 日の聖母被昇天の祝日には、全国から徒歩で巡礼者がやって来る。そんなポーランド人にとっての精神的な中心地にも、マクドナルドが既にあり、しかも主人公がその恩恵を享受しているところに、この歌のおかしみがある。



この歌が発表された頃には、皮肉の対象として、まだマクドナルドしかなかったのかもしれないが、現在のポーランドでは、実に様々な国籍、経営形態、資本のファースト・フードが見られる。

中でも、今ポーランド人に最も人気のあるファースト・フードは、オリエンタル料理だろう。例えば、炙って削ぎ落とした肉を野菜と一緒にパンに挟んだ中東料理などが、露店や個人経営の店で売られている。また、アジア料理の露店も、例えばワルシャワなど、地域によって見られる。

一方で、昔ながらのミルク・バーも存続しているが、現在では「ミルク・バー」と呼ばれることは稀で、それぞれ独自の店舗名を冠している。

さらに、伝統的なピエロギ専門店や、カトリック教会の慈善団体「カリタス」が経営する食堂も残っている。

ハンバーガーやフライドチキンだけでなく、ポーランド人にとってオリエンタルな料理も含めて、ポーランドの食文化の多国籍化が進んでいる。提供される味の多国籍化が進んでいると同時に、それを消費するポーランド人の味覚も多様化している。そして、この傾向は、今後も続いていくだろう。EU に加盟したポーランドは、他の国と同じように、「グローバル化」という名の「発展」をし続けていくだろう。そしてそれに伴い、「グローバル」なファースト・フードの味にポーランド人が馴染んでいき、私の覚えている古き良きポーランドらしさが少しずつ薄れていくのが残念でもある。

つだ みつてる (ポズナン外国語大学講師)